

## チアリーダーvs 触手【即堕ち風味】

とある廃工場の裏通り。

いつも不良の溜まり場と化し、時には勢力同士で、あるいは同じチーム同士でのストリートファイトが繰り返されている。コンクリートの床や壁には血飛沫の跡も見られ、その場で行われる闘いの激しさを物語っている。そんな場所に、一人だけその空気に似つかわしくない者が居た。

「はああっ！！」

ミニスカートから伸びた長く華奢の脚が、屈強な男の胸に突き刺さる。

額、頬、肩、あらゆる部位が既にアザができ、トドメに蹴り飛ばされた男は声も出せずに気を失ってしまう。

「あら、もうお終いなのお？」

場違いなチアリーダーのコスチュームに身を包んだ少女の名はアリー。

廃工場から少し離れた学園のチアリーダー部員だ。

何故そんな少女がこんな血生臭い場にいるかと言うと……

「ねえ貴方達、お相手お願いできるかしら？」

不良達がたむろしていた時に、彼女自らが「お忍び」に、自分の脚でやってきたのだった。

アリーは地元の権力者の一人娘で、近所では「カンペキ超人お嬢様」で名の通った美少女だ。

文武共に突出した能力を持ち、それでいて明るい性格でチア部のムードメーカー。

輝くブロンドに木目細かい白い肌。その美貌と人気は庶民から彼らの間でも「やりたいランキング」上位に食い込む女性。

本来なら「縄張りを侵した洗礼」として手厚い持て成しを尽くすところである。

が、一人でやってきたとはいえ権力者の娘。流石の無法者共もいつもなら腫れものに触るが如く、その日は無視して解散するはずだったが……

——勝てたら、好きにしてい——

何を思ったか、アリーは不良達の縄張りを荒らしストリートファイトを持ちかけることの代償に、自分の体を賭けたのだ。

アリーはお嬢様ではある。確かに少々世間知らずな所やお高くとまった面も無くはない、が……それ以上にお転婆で、何にでも首を突っ込んで場を荒らす暴走女としても知られていた。

別の不良達が学校を襲った時や体力自慢の教師がセクハラしてきた時など、アリーが力づくで解決に向かい、逆に圧倒しては遅れてきた警察に傷害罪で捕まりそうになった、という話は近辺住民からすれば日常茶飯事である。

また、男遊びが激しい事でも知られており、本来は不名誉な「阿婆擦れ」だの「売女」だの陰口を叩かれても、手を振って愛想笑いするほど。

確かにそんな腕自慢のビッチなら「負けたらレイプ」なんてとんでもない賭けをして来てもおかしくない、かもしれない。

常日頃から「**約束は守る**」と公言している彼女だけに、不良達は彼女の申し出を渋々受け入れた。

結果、彼女は細い体からは想像できない圧倒的な運動能力により、場荒らし所か「期待の新星」としてカリスマを得ていた。

「これでアリーの20連勝だ！」「次はオレと闘ってくれ！」「どうせアリーが勝つだろwアリーに2万賭ける」

不良達は初めこそ嫌悪と侮蔑と油断でもって相手をしていたが、実力・覚悟が本物である事を知るにつれ、

今では日々に退屈していた彼らにとって一種の清涼剤として働くのか、スーパーヒロインの様に扱われていた。

実際、やや小さめなサイズのチアコスで派手に動き回るために大振りな胸は止まっている状態で見かけるのが難しいほど。

頻繁に繰出す蹴りでスカートがめくれ、観客達の目を楽しませる。

終いには自分の手で扱きながらアリーの戦いを拝み、敗北を妄想してアリーに向かって精を放つ者もいる。流石にぶつかけるほど近くではないが。

アリーもおんなな彼らの歓迎に応じてか、縄張りを荒らす「お詫びに」と、アンスコではなく生パンだったり、更にはファンサービスにその場で下着を脱いで観客に放り投げ、そのまま試合を続けてノーパンで恥ずかしげも無くハイキックを繰出す、という光景も珍しくなかった。

「……っふうっ」

そして今日も20連勝を果たし、頭の中では「今日はどんなサービスをしようか」と考えながら、小休憩も終えて21戦目に向かう所だった。

が、丁度構えたその時。

『ゴガァァン』と、いくつもの鉄筋が落ちた様な騒音が廃工場から響いた。

不良が暇潰しに廃工場を漁るのは珍しくなく、その程度の音も同様である。むしろアリーは相手が音に僅かに反応した隙を見て、仕掛けようとした瞬間、再び騒音が響き、同時に男が悲鳴を上げる。

そして違和感に気付いた観客の一人が様子を見に行き……途中でガクガクと震え、後ずさりする。

「（え…何？別のチーム？ケーサツ？それとも…まさか…？）」

目線や構えはそのままにアリーが思考をめぐらすのが、男が見たモノは——

「ば……化け物…」

工場の出入り口から出てきたそれは、ずしっ、と重く鈍い音を立て、ゆっくりと近づいてくる。

黒く巨大なそれは、確かに化物と呼ぶに相応しいモノだった。

丸みを帯びた巨大な本体だろうか、それから伸びた幾数もの触手。少なくとも場にいる全員が、今まで見た事もないモノが、触手の一本で男一人の首を締め、軽々と持ち上げている。

何かの演出なのか、それとも――

男達が狼狽している中、触手が何の感情もない動きで、締め上げた男をこちらに放り投げる。

『ピチャッ』と生々しい音と共に、コンクリートに叩き落とされる。

「う、動かねえぞ……」「し…死ん…でる……！」

力無く倒れる屍を見て、不良達は軽いパニックに陥る。逃げようとする者、足が竦んで動けない者、ハリボテだと必死に言い聞かせる者、武器を用意する者…

もはや対戦どころではなくなり、アリーの対戦相手も不安からダッシュで逃げ出してしまう。

「何なのよあれ……作りもの…？」

男が一人殺された事よりも、折角の勝負がお預けされた事に怒りを燃やすアリー。

並みの達人でも怯むほどの本気の眼差しで黒いモノを睨みつけた。その直後、

『タァン』

男の一人が持っていた銃から甲高い音が轟く。

男はぶるぶる震えながらも、銃弾が命中したのを確認し、一瞬安堵するが

『ずるっ…』『カラン』

止まることなくゆっくりと近づいてくる。モノの肉に一瞬食込んだ銃弾が乾いた音を立てて落ちる。全く効いていないのか、弾痕も残っていない。

「なんだよあれ……作りモンじゃ、ない……？」

「クソがッ！」

続いて別の男達が鉄の棒を、槍投げの様に化物に投げつける。『ドッ！』と何本もの鉄棒が真っ直ぐに突き刺さるが、これも全く傷跡を残さず、空しくコンクリに落ちる。

「ウソ、だろ…」「け、ケータイも繋がんねえ！」「……………」

男達が一瞬だけ逡巡し、直後に一斉に逃げ出さんとした時！

「よくも…」

凄まじい鬼気を放ち、骨の軋む音が聞こえるほど強く拳を握り締め、ゆっくり化物に向かって歩いていく。

「よくも邪魔してくれたわね…!!」

睨みつけながら、ずんずんと少女が近付いていく。

「お、おいアリー…」

さすがに人外の存在に敵うはずがない、そう思って声をかけるも、一度タガが外れた彼女は誰にも止められない。

……触手の射程圏内に入る……

その一瞬、触手の一つがその大きさとは裏腹に、目にも止まらぬ速さでアリーを襲う。

男達が無残な結果を直視しまいと目を反らそうとした時には、既にアリーは触手をも上回る速度で身を翻していた。

「アタシの邪魔するなんて…千年早いのよッ！！」

2～3M跳び上がり、思いつ切り振り上げた左足が鋭く撃ち落とされる。

鉛よりも鉄よりも重く鋭い音が鳴り、化物の動きが止まる。

……………

「や……やった…？」「流石アリーだ！！」

男達が安堵し歓声を上げ、アリーも振り向いて舌をチロツと出し、余裕のポーズを作り、着地する直前、

止まっていた化物の触手が何本も同時にアリーに向かってくる。

「ッ！！」

当たる寸前で化物の体を踏み台にし、後ろに跳びずさる。何本かは避け切るものの、一本だけかわし切れず、左腕にしなる。

『ヴァヂィィ』

「ツクうう～～～！」

どんな屈強な男の攻撃だろうと、鉄パイプでさえも一撃くらいなら余裕で耐える彼女が、柔らかそうな触手の鞭に唸りを上げる。

一瞬の隙を逃さず、次の触手がアリーの腹目がけて打ち込まれる。

「ぐッ……！！（ウソ……アタシが、こんなのに……）」

「ア、アリーが……」「マジかよ……！」

もはや人間を超えたのでは、と冗談半分にも言われる大将格が、為す術なく弄ばれる。

完全に打つ手が無くなった弱者達は、喚き散らしながらその場を去っていく。

触手の一本がアリーの左腕に絡みつく。

「ああもうッこの…」

傷んで思い通りに動かない腕にイラついて八つ当たり気味に引っ張るが、当然離れない。

まだ消えない闘志の中、反撃の一手を考えるが……その時。

【クク……他の人間共は皆逃げ出していったぞ？お前一人だけ取り残してなあ】

「！！？？ え？何？」

突然、誰かの声が聞こえる…感じる。

「今の……アンタ…？」

まさか、と思いつつも、他に答えが見つからず、化物に人語で話しかける。

【その通りだ…やっと通じたか人間】

一瞬困惑の表情を浮かべるが、この状況ならもはや納得するしかなかった。これが俗に言う「頭に直接語りかける」、だろうか。

「アンタっ、よくもアタシの楽しみを邪魔してくれたわねッ！」

【それはこっちの台詞だ…さっきからチョコマカと、鬱陶しい……これでは“オンナヲオカス”使命が果たせんではないか…】

「へっ？だ……だからアタシを狙ってたの…？」

きょんととして、場違いな可愛らしい声が出る。

——もしかして、AVとかエロマンガとかにありがちな……？——

などと呑気に考えていると、意外な答えが返ってくる。

【何…？ お前が“オンナ”だったのか……】

どうやら、伝わってきた感情からするに、この化物はまだ人間の事を理解しきっていないらしい。

【そうかそうか……早くも相手が見つかったのか…善き哉善き哉…】

どうやら使命を果たす相手が見つかり、それまで攻撃していたアリーに対し、好意に近い感情を持って喜んでいる様だが、

「アンタ……アタシを何だと思ってたワケ…？」

このムッチムチのカラダ！輝くブロンドッ！白いお肌！！

どっからどー見てもオンナでしょーがッ！！！！

女扱いされていなかった事を知り、間違った方に怒り狂うアリー。

自慢のボディを強調しつつ、それまでになく力を込めて睨みつける。

【だがこのチカラ…人間のレベルを超えているぞ…？】

「ナメないでくれる？アタシはチョー天才で、その上 鍛え方がフツーじゃないのッ！」

返答ついでに渾身の前蹴りを突き出そうとするが、空いている触手に絡み取られてしまう。

「あッ…！」

【確かに…データを越えたチカラだ。オカス相手は多い方がいい…良いサンプルになりそうだ】

化物は更に触手を伸ばして絡め、両手両足を拘束する。

「な、何をッ…？」

ほとんど身動きできない状態で必死にもがく。

【さっきも言っただろう？なにぶん初めてなんで勝手が分からんが……】

化物の本体に口の様なものが開く。アリーはギョッとして見た瞬間、甘ったるい煙を勢いよく噴出してくる。

「ッッ？！（まさか、毒…？）」

生命力を奪い類の何かかと思いきや、じわっと体が熱くなってくる。だんだん腕に力が入らなくなり、下腹部辺りが疼いて…

「まさか、これ、」

媚薬か、と分かった瞬間、敏感になった乳首を触手がかすめる。

「ひゃんっ！」

急に与えられた強い刺激に思わず体が痙攣、胸をブルンと震わせながら小さく啼いてしまう。

一気に体の力が抜け、その隙に触手に体が持ち上げられる。

空中でやや逆さ気味に傾いて仰向けになり、更に両脚が無理矢理広げられ、化物に対して股間を見せつける姿勢にされる。

【お前をオカス】

「いつ……イヤあああああッ！！」

力が入りきらない体で、反射的に悲鳴を上げる。じたばたと足掻くが、やはり触手から逃れられない。

【ん？お前の記憶を見てみたが…“オカス”事はお前にとって普通ではないのか？お前自身、弱い男をオカシた事もあれば、自分より強い者にオカされたと思う事もある様だが？】

どうやらこの化物は人の記憶もピンポイントで読み取れるようだ。

「(か…勝手に人の頭ん中覗き見しないでよね…！)」

確かにアリーは性に食欲で、セックスも荒々しい。

弱々しい年下男子を無理矢理逆レイプした事もあるし、自分より強い男がいれば、滅茶苦茶にしてもらっても構わないと思った事がないではない。

……まあそんな男はいないわけだが。というか、  
「アンタは化物でしょッ！？それに、本当のムリヤリなんてゴメンよッ！！」  
力が入らない姿勢で、まだ覇気を出して怒鳴りつけるが……

『くりゅっ』

「あッ！」

触手の一つが、再び胸に触れる。愛撫というには少し乱暴に、形を変えるほど押し付けてはそのまま力を入れ、限界まで押し付けたところで胸が耐えきれなくなり、形を取り戻そうと勢いよく揺れる。

「あううっ」

何の経験もない幼稚な児戯にすら体が疼き、乳首は限界まで勃ってしまっている。  
更にもう一つがスカート越しに尻の割れ目を、もう一つが秘部をアンスコ越しになぞり上げる。

「んう〜〜っ！」

歯を食いしばって必死に耐えるが、もうそろそろ快樂の波が限界まで迫ってきている。

「（ウソ……ウソよ…こんな、化物なんかに…感じたりしないッ！）」

『くりゅくりゅっずちゅううっ！！』

触手が再び同じ運動を、激しく、荒々しく繰り返す。触手が段々と粘液を運び、それが先の煙と同じ効果があるのか、一気に追い詰められてしまう。

「っっあああああ〜〜〜〜ッッッ！！♥♥」

『プシッ！プシュウウ！！』

ピクピクッと小さく激しく痙攣し、化物に勢いよく潮噴きしてしまう。

「う……ウソ……こんな……////」

快樂に蕩けた顔で、口からだらしなく唾液を垂れ流しながら、無理矢理イカされた事を否定する。

【ほう、相手より先にいくのは初めてか。余程この触手が気に入ったか】

「ち、違うッ！これは、さっきのクスリのせいでッ！////」

アリーは淫乱ではあるが敏感ではない。媚薬らしきもので無理矢理発情させられて、ましてや自分が先にイカされるなど、耐えがたい屈辱だ。罵られ、顔を赤らめながらも必死になって快樂を拒絶する。

イキ恥を晒しながらも表情だけは毅然として相手を睨みつけるが

「ひッ……！」

更に体を傾けられ、逆立ちに近い状態になる。触手が丸見えになったアンスコを強引にずらし、秘部を曝け出す。

ぬっ……と近付いた 男性器に酷似した——性器にしては極太の触手が、秘部に狙いを付け、今にも挿入せんと、我慢汁のように媚薬で湿る。

【そろそろ屈したらどうだ？楽になるぞ？】

「だ、誰がッ！」

いくら薬を使われようと。どんな人外が相手だろうと。生涯ただ一度も負けた事の無い女が、性欲に屈するという選択肢などなかった。

「てゆーか、アンタ、初めてなんでしょ？w ドーテーチンボなんかに、アタシが負けるワケないじゃないッ……！！」

せめて心だけは屈しまいと、逆に相手を煽りつける。火照った体で汗を流しながら、相手を見下した目つきで精いっぱい挑発する。

【まあいい、行くぞ……！】

…極太がゆっくり近づき、キスする様に軽く触れ——

「…………（触手なんかに、負けたりしない！！）」

…一気に突き落とされる

『ズボオオオオオオッ！！』

余りにも強烈な快樂。

女の体を調べ尽くした魔物の媚薬を体中に塗り込まれ、無理矢理に限界まで発情させられた体。

今まで味わったどんなものよりも太く、長く、硬いものが、一突きで隅々まで抉り上げ、子宮口に突き刺さる。

性の道を極めていたと自惚れていた女が、たった一撃で、快樂により力の限り仰け反り、舌を突出し、唾液を溢れさせて啼き叫ぶ。

「アヒいっいいッ！！イッダううううううう！！♥♥♥」